

廓（くるわ）

第二部

西口克己著

廊（第二部）

定 価 150円

1956年12月20日 3版発行

著 者	西 口 克 己
発 行 者	田 畑 弘
印 刷 所	松 崎 印 刷 株 式 会 社
製 本 所	新 生 製 本 株 式 会 社
発行所 株式会社	三 一 書 房

京都市左京区北白川西平井町24
振替 京 都 6 4 0 2 番
東京都千代田区神保町1ノ14
振替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁はおとりかえいたします

三一新書 42

廓

(くるわ)

第 二 部

西 口 克 巳 著

目次

第一章	五
-----	---

鞆	密談	女郎屋大会
片手間	狂死	

第二章	九
-----	---

鬼の子	俊太の手記一	俊太の手記二
俊太の手記三	俊太の手記四	

第三章	三六
-----	----

代議士	東北みやげ	国策
特高	泥と血と	

第四章……………一九

移動監房

半舷上陸

位牌部屋

將軍敗走

炎の中

第一章

鞆

昭和六年、夏——暑さばかりでなく、世間が不景気で
あえいでいた頃であった。

京都駅を発した東海道線上り夜行列車の、まばらに空
いた二等車の一隅に、向合ってデンと席をかまえた品の
わるい二人の五十男があった。どちらも上等の麻の洋服
姿で、チョッキに時計の金ぐさを光らせていたが、と
りわけ見事な禿げ頭の、デップリ肥った男の方などは、

いつのまにか上衣と靴をぬいで、青いビロードに白布を
かけた柔かい座席の上へ大あぐらをかいていた。

「夜汽車アちつとはましかとおもたら、やっぱしむし
暑うおまんな——へっへっ、けんど、まあ、官費旅行や
でな。赤切符で、玉探がしに九州くんだりをかけずりま
わってるのにくらべりや、こら極楽や」

こういいながら、ネクタイをはずして太い猪首の汗を
ハンカチで拭っていた彼は、やがて窓ぎわに吊下げてあ
った上衣のポケットから金鵒正宗の二合瓶をひっぱりだ
したかとおもうと、ニヤリと笑って相手にすすめた。

「大將、一杯きゅつとやりなはれ、夜汽車アこれに限
りまっせ」

「うむ——けんど、展、お前、何のためにわしと一し
よに東京行をするンや、わかつとるな」

「へえ、それア——」

相手の重苦しい態度に氣押されて、改めて車室の中を
眺めわたした展と呼ばれる男の目つきは、瞬間、キラリ
と妙にするどく光った。まさしく、その目つきは、一く
せも二くせもあるこの男の前歴を暗示していた。おまけ

に、気がついてみると、二合瓶を器用に握っている彼の右手の指は、不気味にズラリと三本欠けて、土しようがのような傷痕を見せているのだ。

「へっへっへっ、大将ア人がわるい。なあに大丈夫、齡アとっても、わしの目に狂いはおへん、この車の中には——」

「ふん、廿五年前の、お前の同職はおらんか」
低く押しかぶせるように、皮肉に問返した男は、年かっこうこそ変つてはいたが、あの糸のようにほそい眼を冷たく底光りさせた鰐口貫太だった。相手は、いうまでもなく昔の大阪スリで、現在では貫銀楼から貫の一字をもらつてノレンわけされた女郎屋、貫辰楼の席主、辰太郎である。

「へっへっ、おるも、おらんも大将、だいいち、そないに肩ひじ張つて用心してるちうことが、じつア奴らにがんをつけられるもとなんだっせ。わしがお伴してるかぎり、まあ大舟に乗つたつもりでいなはれ」

「うむ」
にが笑いを浮べながらも重々しくうなずいた貫太は、

辰太郎のさし出した小さなアルミの盃を、冷酒がこぼれぬよう、用心しつつ受けた。

「わしア一杯でえ、どうも脚に悪いでな。あとは、お前が飲め」

「へえ、近頃でもやっぱし工合悪うおまつか——痛みまんのか」

「なあに、たいしたことアないが、無理がつづく、と、電気でしびれたようにジンジンとうずきやがる。とにかく、お互いにもう無理のきかん年やでな」

片脚の膝がしらをなでながら、氣むずかしげにつぶやく貫太の体格は、だが五十の坂をこしたとはいへ、まだまだゴロツキの二人や三人の相手は出来そうに頑健に見えた。すくなくとも、こうした愚痴さえこぼさねば、これが十数年来の慢性の脊髄炎になやまされている男の体とは、どうしても受取れなかった。が、さすがは寄る年波をあらそえず、その鐘馗の顔をうんと醜くしたような人相にみなぎっていた一徹さも、永年にわたる生活のしわを刻みこんで、むきだしというよりは、何かすりつぶしたような複雑な暗さの底に沈んでしまっていた。

「ときに、大将」と、手酌で器用に冷酒をあおつていた辰太郎が、低声で訊ねた。

「東京へ着き次第、さっそく仕事にかかるンでつか。それとも——」

「まあそんなことアわしに委せておけ。けんど伏見あたりのこつば巡査や役人とちごうで、相手が相手や。河崎代議士との打合せどおり、うまい工合に事が運ぶか、どうか、行つてみた上でのことよ」

「へっへっへっ、なるほど——それにしても何だんな、金銭ちうもんは有難いもんだんな。世の中は何もかも、えらい変りようやが、へっへっ、こいつの有難味だけは一向に變りよらんでな」

「うむ——」

うなずいた貫太は、眠気をさそうような單調なレールのひびきに、じつと耳をすませていたが、やがて、ふと思いだしたような口調で、にがにがしく、いつてのけた。

「廿五六年も昔のこつちゃ。わしが中書島で店開きしたとき、死んだ岡本の隠居が、警察へ袖の下を渡せとす

すめてくれたのを、そんな死金はまっぴらごめんと蹴飛ばしたもんやが、ふっふっふっ——浮世のカラクリちうもんは、妙なもんやのう……」

車窓の外の黒一色に塗りつぶしたような闇のなかを、遠くチラチラとまたたきながら人家の灯らしいものが、次から次へと後の方へ押しながされてゆく——あの灯の下に、どんな人々が住み、どんな世間の苦勞に押しひしがれているのか、そんなことは知るよしもないのだが、そうした窓外の闇を、じつとにらみつけながら、いつしか貫太は、柄にもなく過去の追想へ引きずりこまれていた——

「世の中は何もかも、えらい變りようやが——辰太郎の云草ではないが、貫太が女郎屋の店開きをして以来明治・大正・昭和と、すでに廿数年の年月がながれ、世間は、すくなくともその外観を大きく変えていた。

中書島の廓の中だけを見ても、あの芝居の書割りのように軒をならべた女郎屋の薄暗い行灯は、青白いガス灯へ、さらに黄色い電灯や五彩のネオンへと、しだいにそ

の花やかさをまし、廓正面の宝来橋も、あの紅がらの欄干に名ごりをとどめていた明治ふうの情緒もどこへやら、すでに近代的なコンクリートの短かい橋に替ってしまっていた。というのは、昭和御大典の記念事業とやらで施工された淀川の護岸工事が、この支流の入口に大きな閘門をもうけ、沿岸の埋立てで川幅が半ば狭められたのだ。もはやあの華麗な弁天寺の夏祭を昔ながらに水上でくりひろげることはおろか、この薄汚れた運河のような流れの上では、屋形舟一つ浮べることさえ、首をかしげざるをえなかった。つまり中書島は、いまや島というよりは、地形的に何の区別もない伏見の町の一部になつてしまい、その伏見がまた、町から市へ、さらには京都市伏見区へと発展していたのである。

だが——こうした外見上の変化にもかかわらず、廓そのものは、一向に消えも失くなりもしていなかった。むしろ、明治末期に貫太が厚司一枚の姿で流れこんで来た頃には卅数軒よりなかった女郎屋店が六十数軒にもふえ、百人あまりの娼妓が二百数十人にもふえていたのだ。

貫銀楼は、中書島一番の老店だった。のれん分けした店は辰太郎の貫辰楼をはじめ、かつての若狭娘おトミが縫之助という源氏名で三年の年期を勤めあげたとき、なじみ客の出入り大工を亭主にして店を持たせてやった貫富楼、第二貫富楼など四、五軒におよび、ほかに女郎屋の貸店を四軒も持っていた。当の貫銀楼そのものは、弁天寺に面した大きな新築の角店で、廿幾室かの女郎部屋をもち、十数間の総ヒノキ作りの立格子をめぐらせた二階側面にズラリと明るい電灯の輝いた華やかさは、当時としては不夜城ともいうべき豪華な構えだった。この新築は、第一次大戦の好況の波にのった貫太一流のチミツで強引な荒かせぎの産物だった。棟上式のときには、廿人あまりの大工、左官、薦職などが、貫銀楼と染抜いた揃いのハッピに向鉢巻で、鶴亀の木やり節を唄いながら、手ふり足ぶみおかしく行列をつくって廓内をねり歩いたものだった。

貫太は五十六歳になっていた。後にものべるように、あの恋女房のお銀はすでに亡く、後にのこされた一人息子、俊太のために、以前から後家になって生活に困って

いたお銀の姉を後ぞいとして娶っていた。お常というこの後妻は、姉妹でもこんなにながうものかとおもわれるほど、体もズングリと小さく、愚直で地味な性質だったが、なまじ水商売向きのする赤の他人を迎えるよりは、何といつても甥の俊太を可愛がつてくれるにちがいないという貫太の子ほんのうの一存から、貫銀楼の大世帯を切廻す女将の後釜にすえられたのだ。この俊太は、死んだお銀があれば待ちこがれた最初の子供ではなく——それは女兒で一誕生もたたぬうちに早死した——それから数年の後、ようやく生れた子供だった。しかも恋女房のお銀に生写しの、頭のするどい子で、現在ではすでに廿歳をこえて、貫太の独り約束どおり、東京帝大の学生になって実家を離れていた。

こんなわけで貫太は、家庭的には必ずしも満足していなかったし、自分自身、十数年来の疾病になやまされてはいたが、廓内ではもとより、世間的にも今やれっきとしたボスとして羽振りをきかせていた。彼は、京都市内を除いた府下の八遊廓で組織され、女郎屋・芸妓屋・料理屋を一まとめにした三立会なるものの会長を永年に亘

って引受け、地元の中書島には子分格の貫富楼の席主を取締役にすえて、文字どおり京都の色町での立役者になっていた。もちろん、女郎屋としての屋台骨や財産からいえば、彼を上廻って慾ぶとりしたような席主が、他の廓にはかなりいた。が、そうした連中をすら抑えつけ、ひきいてゆく貫太の手腕は、だから決してこの社会にあらがちの因襲や金力ずくのものではなかったのだ。それどころか、いつのまにやら彼は、当時の政党にも片足を突こみ、民政党の有力な地方ボスとなっていたのである。

貫太の政党入りを仲介したのは、貫銀楼出入りの星沼という内科医だった。この町医者、定紋つきの人力車で、せつせと患家先をかけずり廻って貯めこんだ小金を、何年目かの地方議員の選挙に立候補しては、すっかりすりへらしてしまふという、どの地方にもよくある名誉慾につかれた政治狂の一人だった。なまずヒゲを生やして、開業医としては立派な腕をもちながら、博士になるよりは代議士になることを一生の念願としていた彼は、そのころ伏見桃山に宏壮な別邸をかまえていた片丘

戯相の急病を偶々治療したのが機縁となり、以来、程よく可愛がられるのを徳として、相手を政治上の大先輩とあがめ、自分は祕かにその懐刀を以て任じていた。よらば大樹のかげというわけである。で、貫太もときおりこの医者につれられて、宏壮な別邸に出入りし、いわゆる家の子郎党として内々の御馳走にあずかったこともあった。

ところで、この見るからにごうまんで冷酷な顔をした関西財閥の政治的代表者が、たかが伏見の町の開業医や廓のボスを、こんなふうに掲げてみせたについては、あながち理由がなくもなかった。いわずと知れた選挙の票集めである。昭和三年の普選以来、このことは特に必要になっていた。京都二区——この同じ選挙区で、あの有名な労農党の山本宣治代議士が、貧農と労働者の支持によつてかく得したものを、彼はこれら地方ボスを手なずけることでかく得しようとしたのだ。彼らは、不況に押しつぶされた村々を、官憲の圧迫をはねのけつつ声をかちとして演説してまわる「山宣」の後を追って、立派な自動車而走らせ、農民たちの目にふれる場所で、わざと車

轡を溝や田圃につつこんで人手を借りた。そうして、かねて用意の紙幣束を、お礼のしるしという口実でバラまくのだった。金包を受取って皆に配るのは、あらかじめ氣脈を通じていた小地主や富農たちで、彼らには自動車は何日何時にどこの村道で故障を起すということまでチャンとわかつていた。おまけに、車が砂埃をあげて走り去った後、紙幣束をガツガツと分けあっている農民たちの顔色をうかがいながら、釘をさすのを決して忘れなかった。

「なア皆、なんば演説で貧乏人の味方やいうたかて、山宣は宇治一番の大料理屋の若旦那や。ほんまに味方やちう証拠は、どこにもあらへん。それにな、これア内証やが、警察では山宣に投票しそうな百姓を、赤やちうて内々シラミつぶしに調べあげてるちうこっちゃで。ふつふつ、さわらぬ神にたたりなし——皆ア氣イつけなあかんぞえ」

だが、しつこい妨害や弾圧にもかかわらず、山宣が堂々と当選したときの片丘蔵相の表情を、貫太は今でもハッキリとおぼえていた。それは俗にいう苦虫をかみつぶ

したというような単純な不気嫌さではなく、まさに憎悪と復讐の念のこもったふてぶてしい支配階級そのものの顔だった。いやしくも世の中に、金力に屈服せぬ者があゝるなどということは絶対に許せない。もし相手がどうしても屈服せぬというのであれば、あらゆる手段にうったえて、いずれはこの地上からまっ殺せねばならぬ——そうして、このことは一年後に、右翼の暴漢による暗殺という事実となつて果されたのだった。

「ふうむ、金銭の力か……」

暗い車窓から目をそらせて、辰太郎の独酌ぶりを眺めながら、貫太は心のなかでにがしく、だが味わうように、くりかえし呟いた。考えてみれば、ふしぎだった。金銭がその力をまともに發揮するのは、いうまでもなく正規の算盤勘定——商取引の上のことである。貫太が昔、半ばやけくそになつて、銭もうけをするなら、いっそ地獄の真中で大の字になつてもうけてやれと女郎屋の店開きをしたのも、スリや泥棒とちがつて、その稼業を法律にかなつた、いわば正規の商取引の埒内にあるものと考えてのことであり、世間が何といおうと、その信

念は今でも交つてはいない。むしろそれよりも店開きの弱味につけこんで、暗に賄賂の催促をした警察権力の醜さにむかつ腹を立てたものだった。ふん、女郎屋の上前をハネて、何が帝国警察やい、と。むろん世間の醜惡さを何も知らない甘さからではなく、持前の一徹さからであった。だがその後の永年にわたる女郎屋暮らしのなかで、しばしばその一徹さを逆撫でされるような場数をふんできた貫太は、いやでも次の事実——金銭というものは正規の取引以外にも恐るべき力をもつたものであり、筋の通つた算盤勘定といい、闇の取引といい、互に入りまじつて、はつきりしたケジメなどつけられるものではないということを確認させられたのだった。で、かつては賄賂のやりとりを唾を吐きかけた彼は、いまでも相変らず受取る側の男を内心するどく輕蔑しながらも、贈る側の立場だけは、ふてぶてしく割切つていた——ふん、今をときめく大臣でも、選挙となれば紙幣束をバラまいて百姓を買収しよる。法律なんて、ええ加減なもんや。それにくらべりや、むしろ商売人は、弱い百姓を金銭で釣るんやのうて、逆に、法律の番人づらをして威ばつてく

さる役人や警察官を、ワイロ鍋でジューンと煮つめて骨ぬきにするだけのこっちゃないか、と。つまり貫太の徹さの底には、権力にたいする盲目的な憎しみがひそんでいたともいえるのである。

列車が真夜中ちかく浜松駅に停車したとき、すでに冷酒の二合瓶をべろりと飲みほしていた辰太郎は、座席にあぐらをかいたまま両手で車窓のガラス枠を押し上げ、はげ頭を突きだしながら、二等客らしからぬドラ声をはりあげていた。

「おーい、駅弁ッ、ここや、ここや——すまんが鯛めしを二つくれんかア」

わに皮の大きなガマ口から、指の欠けた右手で器用に銀貨をつまみだして支払いをすませた彼は、かかえた折詰の一つを、さつきからウトウトしていた貫太の前へ差出しながら、ニヤリと笑った。

「へっへっ、大将、夜食がわりに一つどうだす。鯛めしは沼津あたりが本場らしいが、この駅のも割合にいけまっせ」

「うむ——わしア、ええ」

「まアそういわんと、ちよつと箸をつけなはれ、功德になりまっせ。あの駅弁、真夜中までサービスしとるんやが、えらいもんだンな、不景気なのか眠たいのか、何や知らんが、ずうつと並んだ三等車の窓から誰一人、顔を出しやらンでな」

やがてガタンと一揺れして静かに動きだした車室で、眠気ざましに敷島タバコをくゆらせる貫太と向合って、辰太郎はひとりでうまさうに鯛めしをつついていたが、ふと思出したように三白眼を光らせながら、低声でいいだした。

「ねえ大将、駅弁で思出したンやが、なんでも東北地方はえらい饑饉やちうことだンな。わしア字が読めんもンやで、こないだ新聞を読んだかアから又聞きしたンやが、どだい、あの地方では汽車の窓から投げすてる弁当ガラの残飯を拾うために、子供がレールの傍へウヨウヨ集まって来よるちうやおへんか」

「うむ、そうらしいの」

「してみると、わしらの商売に大事なタマも、だいぶ

ン売りに出て、立金も下ってる勘定だんな」

「うむ——しかし、あの方面のタマは昔から江戸どまりと足場が定ってるでな、ちょうど関西に九州女が多いようなもンや」

「なるほど——けんどね大将、わしア今度大将のお伴をして東京へ行つたついでに、ものは試しや、あの方面を一廻りして来たる思うてまんねやが、どんなもンでつしやる。この不景氣の最中に、いつまでも昔ながらの紹介人まかせて九州のバツテン女ばかり高い手数料で引いてるのも、能のない話やでな」

「それアお前の腕次第や。けんど大阪弁まるだしのお前がその人相でウロウロして、警察にひっかからんようにせいよ。へたな警察沙汰を起した日にや、足場が遠いだけに身柄を貰下げるのが面倒やでな」

「へっへっへっ、そいつア大丈夫、覺悟の上だす。どっちせい、この不景氣のなかで何とかおマンマを喰つて行こうとするからには、それくらいはやばい橋を渡らんことにア、店の土台にヒビが入りますよってな」

いうまでもなく女郎屋という商売は、暮しにつまづいて

娘を身売りさせる貧乏な人々を前提として成立つていた。が、皮肉なことに、この貧乏人を苦しめる世間の不景氣なものが、あまり度を越しても有難くないのだ。というのは、そうなると辰太郎が現に狙っているように、方々で彼のいうタマ——身売娘がふえるものの、かんじんの店の客足がうんと減るところか、花代や泊代のつけ値が底なしに下落して、どうにも算盤のはじきようがなくなってしまうからだ。辰太郎のあせりは、そんなところに根ざしていた。不景氣でもうけが減るなら、それだけタマの仕込み代を切りつめねばならぬ——世間が何といおうが女郎屋より有難い商売はないとしんから思込んでゐる彼にしてみれば、これは至極あたりまえのことだった。

だが、女郎屋ながらも地方ボスとして政党のお先棒をかついでいた貫太は、辰太郎なみに世間の不景氣というものをも自分の店の間口の広さだけで計るような目先の狭さからは、すくなくとも抜出してゐた。それどころか、あの昭和三年の普選で、いわば敵側の山宣の演説会を、ひやかし半分にもぐりこんで傍聴して以来、近ごろ世間

でやかましい階級闘争だの搾取だのという、いわゆる赤化主義者の言葉にたいして、この男なりに、するどく耳をとがらせていた。ふん、要するに赤なんて奴は世間の不景氣が生んだ片輪やないか、ずっと以前の、大逆事件の幸徳秋水といい、震災で殺された大杉栄といい、所詮あんな世間をすねた狂人みたいな奴に何が出来ろ——これが当時の新聞記事をともに信用していた彼の考えだった。この考えは、二三年前に共産黨員が大量に検挙されたという号外を見たときにも、たいして変らなかつた。故意か偶然か、号外に並べられた共産党幹部たちの写真には、どれもみな前科者そのものの——つまり貫太自身も顔負けするような、兇悪な人相になっていた。が、同時にこの事件は、貫太の胸中にそれまでとは異つた一種の疑惑の念をあたえたことも事実だった。幹部たちはとにかく、それ以下の豆粒のような活字に名をつらねている連中や、おそろくまだ検挙されていない連中の数を考えると、おびただしい人数になる——五人や十人ならとにかく、これだけの大勢の人間が、揃いも揃って狂人になるということは一体どういふことなのだ。のみなら

ず、かつて日露戦争に敗けたとはいへ、まだまだ大国だったロシアでは、レーニンとやらしい男を頭目にした赤色政府が出来たというではないか。検挙された共産党のやつらがどうなろうと一向にかまわぬとしても、いったい、あの警察というものの——と貫太はにがにがしく考えるのだ——昔も今も変りのない人殺しじみた取調や拷問を承知の上で、よくもまア平氣で運動とやらをつづけやがったものだ——今でこそ親分面をしているが、若い頃、その同じ警察や軍隊で散々いじめぬかれ、殘虐さを骨身にてつして味わされてきた貫太にとっては、これだけはどうにも割切れない後味の悪さをふくんでいた。

「ときに大将」と、空になった鯛めしの折箱の中へ、割箸をポキンと二つに折って突込みながら辰太郎がいった。

「大正時代の景氣のええときには知らん顔してやがつたくせに、こちとらの店にそろそろ不景氣風が吹きまくって弱っている今になって、やれ廃娯の何のと騒ぎ立てやがつて——それも救世軍や廓清会なんちう札つきのヤソだけならまだしも、代議士や警察までが奴らのお先陣

をかついで、わしらをいじめにかかるなんて、殺生ちうもんだンな。ちっとア苦勞して高い税金を払うてるわしらの身にもなつてくれたらええンや」

「なアに、世間が不景氣やからこそ、皆が騒ぐのさ——ふっふっふっ、人道問題だの、外国への体面だの、そんなものア奴らが表向きに飾立てとる絵看板よ。そんな絵看板だけで世の中が簡単に動くなんて甘い考えをもつとる政治家なんて、一人もおりやせんわさ」

「そんなら、なおさらのこっちゃ。ねえ大將、そうでのうても客足がへって泣面をかいている店へ、むやみやたらと臨検をかけたり、足抜きした娼妓に廢業をすすめたり、どだい警察のやることア、筋道がちこうてやしまへんかい」

「ふっふっふっ——」

意氣こんで肩をいからす相手を見すえるようにして、貫太はゆっくりとうなずいた。

「そういうことになるな。しかし辰、時勢ということもあるでな、あの浜口總理を射った男にしても、總理のほんとの肚の底さえわかつておれば、まさか殺す氣にア

なれなんだ筈やでのう」

「へええ、それア一体、どうということだンね」

「つまり警察のざこが、時勢ちうものを考慮した政府の命令をシャチコばって形どおりに受取って、手柄顔にはねまわってるだけのこっちゃ。木ッ葉役人にア政府の肚の底までは判らんちうことよ。とことんまで行つたドタン場で政府や議會が、どう転んでくれるかちうことは、これからわしらが試めしに行くところやないか——ふっふっふっ、お前のいいぐさやないが、この不景氣の最中に、まさかドブへただ金を捨てに行くようなバカもないやろかい」

「ふうん、なアるほどねえ」

感心したような、しないような顔をした辰太郎は、夜汽車に乗って以来ずっと網棚にも上げずに貫太が小わきにかかえこんでいる黒皮の鞆へ、ジロリとながし目をくれた。

それは、やや型の古い、ところどころ表皮のすりむけた、だが恐しく頑丈そうな鞆で、しかも錠前がはちきれんばかりに中味がふくれあがっていた。じつは、そのな